



森本英夫先生の思い出

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学フランス文学会 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000979

森本英夫先生の思い出

研究会の記録

彙報

大阪市立大学フランス文学会会則

投稿規定

編集後記

森本先生との旅

秋吉孝浩・傳田久仁子

祈れ、旅が長くなりますように、
初めての港に着く喜びの夏の朝に
何度も何度も恵まれますように、と。
(カヴァフィス「イタカ」中井久夫訳)

研究について受けた御恩については書ききることはできない。学部時代に続いて大学院でも教えを受け、そのあとも大阪市立大学フランス文学会という場だけでなく、すでに1988年に創刊されていた雑誌『周辺』、また語学と中世文学を専攻する学生のために1990年森本先生が創刊して下さった『T.L.L.M.F.』という雑誌の場でも、それぞれ指導を続けていただいた。院部屋でスタートした古フランス語の読書会は、修士論文に向け、中世専攻の学生それぞれの研究内容についての発表会となり、やがて古フランス語研究会となって『レ』の翻訳が完成した。そして、それを本という形に下さったのも森本先生だった。研究会は今でも新しい仲間を増やしながら続けている。いつも学生のことを考え、時間を割き、見守ってくださる先生であった。雑誌『リュテス』にも最後まで目を通し続けてくださり、2022年にいただいた賀状にも論文についての言葉が書かれていた。森本先生がおられなければ、私たちは今ここにこうした形にいることはなかったのだろうと思う。

こうした先生の振る舞いは、教室を離れ、旅先でお会いできた時にも変わらなかった。大阪市立大学の先生方や、留学中あるいは旅行中の院生の方々とは、フランスでお会いすることも多かったし、森本先生に限らず、大学を離れての出会いは、夏のフランスの光や空気、音や匂いとともに忘れられないものとなっている。ただその中でも、折に触れ思い出されるのは、森本先生とご一緒させていただいたプロセリアンドの森への旅である。

1999年の夏は、確か大阪市立大学を退官された森本先生が甲南女子大学に移られた2年目の夏ではなかっただろうか？ プルターニュ方面にご用事のあった先生の日程と、カルニャックに行くつもりだった私たちの日程が重なり、途中までご一緒させていただけることになったのである。その時の記録をみると8月20日、パリから朝一番のTGVで出発した私たち一行は、レンヌの宿に

荷物を置くと、先生の発案でバンボンへと向かうことになった。タクシーに乗り、プロセリアンドの森へと向かったのだ。いつか行ってみたかった森で、モルガンや湖の乙女、ランスロやメルランの気配を探し、メリュジーヌや『レ』に思いを馳せ、細い水の流れをたどりながら、バラントンの泉、そしてメルランの墓とされている石へと向かったあの散策の時間を文章にしようとする、いろいろな断片的なイメージが線になることを拒み出す。土曜の市…バグパイブ…宿のそばの教会の鐘の音…メロン…夏の日射し…中世の衣装…泉…水の流れ…サッカー観戦に向かう人々…埃っぽい空気…渋滞中のタクシー…遠くの喧噪…自転車に乗る女性…出店からのソーセージの匂い…ガレットとシードル…城館の厨房…厩舎…図書室…修道院…ブルターニュのキャラメル…クラヴサン、そして先生からお聞きしたたくさんのお話。プロセリアンドの森で拾った石は、今でもあの夏の日の日射しと、その「場」に触れることの喜びと大切さを思い出させてくれる。

もちろん、そこには先生とご一緒させていただいた他の多くの幸せな記憶も混ざり込む。ある時はパリの古書店をまわったあとのリュクサンブール公園のベンチで、ある時は図書館や美術館の、ある時は大聖堂の前のカフェで、夕刻ともなれば、ある時はソルボンヌ近くの中華料理店、ある時はユゴーも通ったレストランで、ある時はベトナム料理店やムール貝専門のベルギー料理店、ある時はヴァヴァンの角のカフェで、ある時はパリの南の国際大学都市のデンマーク館の中庭で、ある時はパリ近郊への旅に出発する前の駅の中のカフェで、ある時は店の人や街の人たちと話を弾ませ、ある時はその時々で集まることができたメンバーに囲まれながら、ドゥミヤワインを片手に座っておられた森本先生の軽やかな笑い声が耳によみがえってくる。

2019年にベルシュエの『ガストロノミー』の翻訳を出された先生は、それを「仕事納め」と言いながら送ってくださったが、そのあとにいただいたメールには、これから読みたいものなどが幾つも挙げられていた。ご冥福をお祈りすると同時に、先生が旅を続けておられる姿を思い浮かべずにはいられないし、そしておそらくこれからも本を開き、パリを歩けば、夏の日の先生の姿や声が浮かんでくるだろう。先生(と)の旅は続いていく。

しかし 旅はめったに急ぐな。

何年も続くのがいい旅だ。

(同上)

森本先生のお言葉

川北恭子

あるとき、睡眠時間のことが話題になった。一日8時間寝なければ頭が働かないと話す、先生から「何時間寝てるの！ だいたい、朝寝坊の者は仕事をする資格は無い」と喝を頂いた。先生はお酒を飲んでどんなに遅く寝ても早起きだそうである。ご自宅近くの海岸に釣りに行ってから大学の授業に来られることもしばしばあったようである。殊に、白いランニングシャツと貝塚の漁師よろしく褐色になっていく両腕のコントラストは、盛夏の到来を告げてくれた。

先生は、院生室によく顔を出して下さった。決まって、開口一番、関東弁混じりの関西弁で「あんたなあ、あれだよ、あれ」と言われた。ひょっこり登場されては、前のゼミで未解決だった問題や説明を補足して下さった。いつも授業の続きかという、そうでもない。特にこれといったトピックがなくても、とにかく、この言葉。今考えると、「あんたら、元気にやっているか」だったのである。私がすぐに市大に溶け込むことができたのは、フレンドリーな院生仲間はもちろんであるが、先生のお蔭であることも間違いない。

思えば、先生に初めてお会いしたのは、大学院後期博士課程入学試験の日であった。筆記試験の時、恥ずかしながら、古仏の知識の浅かった私は啞然として天井を仰いでいた。その時、私の解答用紙を覗き込む試験監督の男性と目が合った。その男性はにっこり微笑んで去って行かれた。フランス人と電車の向い合わせの席でしばしば投げかけられる愛嬌のあるあの視線、と言えばわかり易いであろうか。不思議に思った。口頭試験では、何とその男性が面接官の中央に陣取っておられた。私が席に着くなり、先生は相好を崩し、「古仏は、やったことがありますか、…」と始められた。

大学院修了年次には、婚約を報告した私に対し「フランス語を生涯の仕事としてやっていくのか、フランス語をアクセサリーとして生きていくのかを決める時なんですよ」とおっしゃった。啐啄の機であったと思う。少し迷いのあった私は、背中を押していただいた気がした。

研究・教育・大学運営の全てに精力的に取り組んでおられた先生は大学人の鏡である。先生に近づくべく努力はしてきたつもりではあるが、足元にも及ばず不肖の弟子であった。先生より賜ったご指導とご厚情に改めて感謝の意を表

したい。

先生のご冥福をお祈りいたします。

1989年4月

久後貴行

初めて森本先生にお会いしたのは、大学1年生で履修した教養の語学の授業だった。高校を卒業してから就職し、その仕事を辞めてから大学に入ってきた私は23歳になっていた。

1年生のフランス語の授業は週に3回あり、先生に教わったのはそのうち読本の授業だった。確か月曜日だったと思うのだが、朝の1限が始まる前に、授業が行われる2号館の教室に着くと、先生は既に到着されていて廊下の窓際で煙草を吸っておられた。それまでに見たことがない細くて長い煙草で、近くでパッケージをよく見るとMR.SLIMと書いてあった。

指定された教科書は（後に出版された文法参考書ではなく）教科書版の『リュミエール』だった。一年間の授業の最初に「フランス語は書かれた文字がそのまま発音記号である」と説明され、綴り字と発音の規則を一通り学んだあとは、いきなりフランス語を音読しなければならなかった。教科書に沿った通常の授業の合間に、やや専門的な語学や中世文学の話をされることもあった。ガリシスムやファブリオというような言葉を初めて聞いたのも、その授業の中であったように思う。

2年生になって西洋文学科フランス語フランス文学専攻に入り、特にフランス語学を勉強しようと考えた。それからは学部生時代から院生時代にかけて、先生が大阪市立大学を退官されるまでほぼ毎年、先生の授業を履修し、授業中はもちろんのこと、授業外でもさまざまなお話を伺った。私が非常勤講師になってからも時々同様の機会を得ることができた。先生のお話は、聞いた時にはおっしゃる意味がよく分からず、後から思い返してどういう意味だったのだろうと考えてみることもしばしばだった。このような意味だったのだろうと思ひ至ることもあれば、後になってやっぱり違うのではないだろうかと考え直すこともあり、いつまで経っても腑に落ちないお話もある。ただ、そうであって

も、先生の言葉を時々思い出してみることで、現実先生に接していた頃とはまた別の形で、先生に触れることができるようにも感じられる。

亡くなられてから、先生が1934年1月生まれだったということを知った。ということは、私が大学に入って先生にお会いした1989年4月には、先生は55歳だったということになる。授業の前に窓辺で煙草を吸っておられたあの時の先生は、先生が亡くなられた時の私より若かったのだ。そのことに気づいて、自分がこの年齢まで大した研究もできずに過ごしてしまったことが身に沁みだ。

森本先生から戴いた「成績表」

中島廣子

森本先生は、私にとって恩師のような存在だった。というのも私は、大学院の修士課程を終えて博士課程に進学した一年後に、大阪市立大学の仏文教室に専任助手として採用されたからだ。この種のケースは当時としては珍しいものでなく、私立の大学であれば教員と学生の二重身分も許されたが、国公立大学では公務員となるため中途退学を余儀なくされた。

こうしたことから、仏文教室でも最年長の加藤^{とみお}美雄先生をはじめとする諸先生が、学部教員としての業務の手ほどきをして下さるかたわら、大学院生に準じた者として、様々な形で研究指導をも施して下さっていた。なかでも、とりわけ長くご一緒出来た森本先生には、すでに独り立ちすべき立場になっても、いつまでもご厚意に甘え続け、何かにつけてお教を乞うことが多かった。そのため、今だから告白するが、ついに先生が定年退職された後は、いささか心細い思いをしたものだった。

そんな私にも、ついに定年を迎える日が巡ってきた。その最終講義の日のことだった。開始まであと一時間を余すのみとなり、研究室で配布用の文書を読み直しながら待機していると、ドアをノックする音がした。開けてみると、廊下に森本先生が立っておられた。三月初めの小雨の降る寒い午後だったので、「どうぞ中へお入り下さい」と言う間もなく、私の在任中に行った教室運営のあり方について、矢継ぎ早に質問を浴びせられたのには驚いた。まさに卒論の

口頭試問に、しどろもどろに答えてゆく学生の姿そのものだったろう。やがて、ひとしきり聴き取りを終えられると、「よし！じゃあ、会場で」と言い残して、さっと立ち去って行かれた。おそらく「優」や「良」は望めないにしても、何とか《passable》の評価はいただけたものらしい。

それにしても、ご退職後も長きにわたり、こうして見守って下さっていた森本先生は（無論、さぞかしハラハラされていただろうが）、やはり恩師と呼ばせていただくにふさわしいお方だ、との思いを新たにした瞬間だった。心からの感謝の気持ちを込めて、ご冥福をお祈り申し上げたい。

冠詞やれ、冠詞！

福島祥行

とにかく国語学がやりたくて、当時、高名な国語学者の塚原鉄雄、井手^{いたる}至両先生を擁する市大文学部に、浪人までしてもぐりこむと、1回生で履修せねばならない「一般教育科目」——高等教育課程が前期と後期にわかれていた時代の、前期課程における必修科目、俗にいふ「^{ばんきょう}般教」である——の「人文分野」では、哲学や心理学や藝術論には目もくれず、塚原先生の「国語国文学Ⅰ」、井手先生の「同Ⅱ」を履修した。当時、授業はみな通年であったから、1月末のことだが、塚原先生の授業は、最終回後に喫茶店で受講生たちに飲みものをおごってくださるのが慣例といふことで、われわれも授業後にぞろぞろと、レモンライスで有名な^{かろ}夏爐といふ喫茶店までついていった。そこで、はじめて塚原先生と話すことになったのだが、その内容はといへば、「国語学がやりたくて国文に進むつもりだったのですが、いろいろ考へたけっか仏文にいくことにしました」といふものであった。じつは、国文のコンサバな雰囲気には臆したのと、ウケねらひなどで仏文にしたののだが、ちょっと苦笑ひした塚原先生は、「仏文にはフランス言語学の森本くんがあるからね」と仰った。これが、森本英夫先生の弟子になることを意識したさいしょのできごとである。

そんなわけで所属した仏文だが、4回生になり、卒論のテーマを決めるのに悩んでゐたとき、たまたま書庫でいっしょになった森本先生は、「なら、冠詞やれ、冠詞！」と、あたかも一子相伝の秘法を伝授するかのごとくいはれ、こ

これはこちらのことをよく観察なすつてのことにちがひないと感激し、忽ちにして冠詞研究の徒となった。じっさい、先生に勧められて読んだ鷲尾猛先生の『フランス語冠詞の話』(大学書林)は、その独自の理論におほいに感銘をうけたのみならず、修論はもちろん、はるか後年の博論にまでいたる冠詞論のベースを形づくった重要書籍である。もちろん、そのときは、卒論で語学を希望する者には、誰彼かまはず「冠詞やれ」といふのが森本先生の常であったことなど、知るよしもない。

かくして正式に森本先生の弟子となり、冠詞論で卒論を書いてみた秋頃、先生、途中経過をお見せしますかとたづねたところ、「あんなのは、書き上がったから見て、よくやったなといふのがいいんだよ!」といふものだから、けっきょく、卒論は、完成してから読んでもらふこととなった。そのくせ、後で修論を書いたときには、M2の4月にテーマ変更したのに、6月には草稿をだせといはれたから^{おどろ}駭いた。泣きながら大卒を書いて見せたものである。

^{あるひくるくるかむりのてふてふ}「或日飛來冠不定分」といふ、今となっては、よくも無修正で合格させてもらったとおもふやうなタイトルの卒論を提出し、修士にあがってみると、博士課程に舟杉さん、川北さんという言語学の先輩たちが進学されたこともあり、森本先生は、うれしさうな顔で、言語学の読書会するぞと宣言した。当時すでに先生は学務が多忙であったこともあり、読書会は学生だけといふこともおほかったが、半年したところで川北さんが留学に旅だったので、それからは、舟杉さんとふたりで、このところはどういふイミかしらんと首をかしげる会がつづいたものである。この会は、次年度に傳田さん、小栗栖さんといふ中世を専門とするふたりが修士に入学したことで、言語学・中世文学の「MOゼミ」と

森本ゼミ 1989年度スケジュール

毎週 木曜日3:10~5:20 勉強会
言語学・中世隔週(4月20日から開始) * 新卒生

毎月 第四土曜日午後 定例研究報告会 2~3人/回
(五月より開始: 4月分はリュテスの会の報告で相殺) 2人 better

夏季集中避暑ゼミ(予定) 3~4日 新卒生のみ
経費は毎月積立(1000円) (参加自由)
教科書印税少々都合提供 読書の選定

して再編され、先生は夏季合宿なども計画されてゐたが、残念なことに、なかなかみな都合があはず、ついに実現にはいたらなかった。

せんだっての「森本英夫先生を偲ぶ会」でも、幾人かの人たちが、院部屋にゐると、先生がつむじ風のごとくはひつてきて、また出ていくといふことを話してゐたが、たしかにそのとほりで、院部屋の電気がついてゐると、必ず不意にはひつてきて、

—おう、勉強してんのか？

—はい

—まだ帰らんのか？

—はい

—……

—先生、どっかいきますか？

—（うれしそうに）あと1時間くらゐシゴトしたら、そのあとな

さいしょから「呑みにいかう」とはいへない恥づかしがり屋でもあった。

やがて、博士を満期退学し、非常勤暮らしののち、まことに幸運なことに、田辺保先生の後任の枠で、母校に採用されてのちは、4年間、同僚としてもお付きあひさせてもらった。評議員やカリキュラム委員長といふ重職を担ひつつ、教授会での発言もおほかった先生は、よく発言のまへに、隣の席から「おい、ちょっと聞いてくれ、この云ひ方で、ちゃんと通じるか？」と自説のアウトラインを述べるのがあった。発話を外化してみづから確認するとともに、30も年下の若輩者にも、内容の事前チェック役を担はせてくれたわけである。

金曜の午後、当時、隔週でやってみた教授会は、たいいてい17時よりまへにをはることはなかったが、その後、森本先生、小西先生、津川先生と4人で、杉本町駅前の居酒屋へいくのがお決まりになってゐた。この呑み会のことは、『Lutèce』の第26号（1996年）に、森本先生退任記念の想ひ出として、小西先生が書かれてゐるが、酒の席で先生から学んだことは、教室で学んだことと同じか、あるひはそれ以上にならう。研究の話はもとより、文学や哲学、さらに市大文学部の昔話や裏話、業界話、さらにはバレ話まで、とりわけ、昔の先生方の話には、たいさう感銘を受けた。長い教授会がさほど苦に思はれなかったのは、たしかに先生がいらしたせゐにちがひない。

フランス言語学はもちろん、フランス語教育についても熱心に活動された先生の教へがなければ、現在の教育も研究も社会貢献もなかったであらうから、

その影響はまことにおほきい。はやく書けといはれつづけた博論の遅さと、こちらはいまだに果たせてゐない単著の出版といふ宿題を思ふにつけ、学恩にむくひてゐないことを恥ぢるばかりである。あいにく釣りに料理にも興味がなかったから、先生の趣味の面ではぜんぜんお呼びでない弟子でもあったが、なんとか学内では、お供の役をつとめられてゐたのかもかもしれない。もっとも、「森本ゼミ」生を中心につくつてゐた研究誌『TLLMF』の、森本先生還暦記念号の、そのときだけ赤い紙をつかった表紙に、Hodéo Morimoto と、堂々とまぢがった綴りを載せたりして、ひどい弟子ではあった。

さういへば、森本先生から受けついで「フランス語学概論」の履修者が思ったよりおほく、当初予定してゐた仏文の演習室に収容しきれなかったことがあった。年度初回だったから空き教室も不明で、やむなく例の夏爐までいき、2階の和室で授業をしたものである。その夏爐で、大阪市立大学フランス文学会の懇親会をやったとき、森本先生は、三野先生、本田先生、平田先生とテーブルを囲んでらしたので、ほとんど話すことはなかったが、これが、直接お目にかかった最後の機会となった。それから15年、いちどご自宅にうかがはうと思ひつつ、雑事にまぎれて果たさぬうち、その機会も喪ってしまった。

この懇親会は2007年3月25日のことだったが、その直後に、夏爐は廃業してゐる。駅前居酒屋はつけ麺屋になった。人は去り、街は変はる。数年後には、文学部も森之宮に行く。もちろん、残るものもある。夏爐の名物料理であったレモンライス、やはり夏爐をいきつけにしてゐた心理学の金兎先生が学長をつとめたをり、引退した夏爐のおかみさんからレシピをもらひ、公認のかたちで、生協食堂めたせこいやで提供されることになった。いまのめたせこいやは、経営母体が変わり和食食堂となつてゐるが、レモンライスは依然として提供されてゐる。そんなわけで、めたせこいやに行くときにはレモンライスを注文するのだが、小春日和の或る日、眼のまへのアクリル製の衝立に映りこむじぶんの姿をぼんやりと眺めながらレモンライスを食べてゐると、11月にしては暑かったせるか、夏の研究室ではたいていシャツ一丁の姿であつた森本先生の姿がうかび、「おい、福島！ 冠詞やれ、冠詞！」といふ、あの声が聞こえたやうな気がした。

附記：その後、拙稿に目をとほしてくださつた方から、最後に会つたのは2007年ではないのはとのご指摘があり、写真を確認したら、2009年3月の中島先生の御退任のをりと（これは中

島先生が想ひ出にお書き)、同年6月21日に南森町のビストロであった「森本会」でお会ひしてゐることが判明した。人間の記憶も移ろふわけだが、師匠不孝であることの証左にちがひない。

森本先生の思い出——叱咤(激励)

藤澤秀平

先生が名古屋大学、そして早稲田大学で学ばれたことは存じていますが、それ以前の学歴については失礼ながら詳らかではありません。ただ、森本先生の中には、元気で、才気煥発で、今はもう死語でしょうか、パンカラな旧制高校生気質がいつでも息づいていたように思われます。

他大学から大阪市立大学に進学したわたしに、先生ははじめ藤澤君と声をかけてくれていましたが、いつ頃からか、おいフジサワ!となりました。その移り変わりが、確かに先生の警咳に触れているという実感とともに、妙にうれしかったものです。

大学院に入ってまだ日が浅い頃、杉本キャンパスのすぐ近くに下宿していたわたしは、時折土曜日、夏の暑い日は蚊取り線香を焚き、扇風機で涼をとっていた「院部屋」で勉強していました。その日は、部屋にたまたま、もう博士課程に進まれていたT先輩もいらしたかと記憶しています。少し日が陰ってきた頃だったか、先生が院部屋の扉から、お茶でも飲みに行くかと声をかけられました。Tさんと二人、杉本町駅の北踏切のすぐそばに当時あった喫茶イーグルでコーヒーを飲みながら、先生の学生時代の勉強ぶりを聞かされました。その時の「赤いシオンペンが出るまで勉強したものだ」という研究者武勇伝は、忘れがたく、研究者の卵になったばかりのわたしには、その後も大きな刺激となりました。

それからずいぶんと時が立ち、先生が大阪市立大学を退官され、甲南女子大学で思いがけなく教員としてご一緒するようになったばかりの頃のこと。

まだ新学年が本格的に始まる前の、教員だけの打ち合わせ会の帰り、先生と南海電鉄のなんばまでご一緒して、乗り換えの長いエスカレーターを登る途中でした。奥さんは元気かと聞かれて、小さな声で別れましたと答えると、うんと勉強して見返してやれ、と先生。「見返す」という言葉に虚を衝かれ、目が

覚めるような驚きを感じたことを、今でもはっきり覚えています。当時昭和の末期から平成の時代をよろよろと生きていた「文弱」青年のわたしのことを、先生はいつも不甲斐なく感じていたことでしょう。見返してやれ、という叱咤とも激励ともつかぬ言葉に、あの元気で、負けず嫌いな、先生の旧制高校生気質をあざやかに印象づけられた一瞬でした。

こう綴っていて思い出したことがあります。そもそもわたしが他大学から大阪市立大学の文学研究科に進学したきっかけも、森本先生でした。当時わたしの卒論指導担当だったのが、サドやレティフ・ドゥ・ラ・ブルトンスなど、18世紀文学がご専門の早稲田大学出身の植田祐次先生でした。その年、しばらく前に亡くなられた平岡昇先生の葬儀などで忙しかったと、12月に入ってから植田先生から成城学園前の喫茶店に呼び出され卒論指導受けた際、大学院進学のことにも相談したところ、大阪市立大学に森本英夫という面白い先生がいると紹介されたことが、今に至る大きな弾みとなったのでした。

一種の含羞からだと思いますが、先生から面と向かって激励の言葉を頂戴したことはありません。それでも、からったとした陽性の叱咤に、いつも暖かい激励を感じてきました。フジサワもいい歳となりました。残された時間もそう多くはないでしょうが、これからも先生の叱咤に応えてゆきます。

「リュミエール」のこと

三野博司

森本英夫先生は、優れた研究者、作家、翻訳者だったが、その本質は類まれな教育者だったと思う。明朗闊達で世話好き、その人柄に接して、勇気づけられ、救われた思いを抱いた教え子は数多いだろう。私と先生との最初の出会いは、大阪市立大学修士課程（現在の博士前期課程）の入学試験のときだった。筆記に続く二日目の口頭試問のとき、三人の試験官が目の前にいたが、その一人が森本先生だった。仏文読解は自信があったが、仏文法の試験問題はまったく準備してなくて、ほぼ全滅だった。「全滅です」と暗い声で答えると、森本先生は実に明るい声で「ほんとうに全滅だね」と哄笑された。それで、私は考えたのだ。不合格だとしたら、本人を前にあんなに明るい声で笑えるはずはな

い。なんとか、ぎりぎり合格したのかもしれないと。

私にとって、森本先生はリュミエール（光）の人であった。大阪市立大学の助教授になってすぐのころ、先生からフランス語の教科書を一緒につくろうと誘われて、まずは初級読本から手掛けた。私が本文を、森本先生が文法説明をと分担をきめて、緊密に相談しながら仕事を進めた。原稿ができて、さてタイトルをどうするかという段取りになった。私としては、ぜひともおしゃれなものにしたいと考えていた。自分の書架にあった映画雑誌「リュミエール」が目に入り、これだと思った。雑誌のほうはリュミエール兄弟にちなんだものであっただろうが、私はむしろ「光」を考えた。幸い読本は好評で、続いて文法の教科書も作った。

「おい、三野君、今度は文法参考書をつくろうや」と言われたときは驚いた。仏文法の専門家でない自分が参考書づくりにかかわって良いものだろうかためらったが、作業は楽しいものだった。初版は1992年である。版を重ねて、2000年には改訂版、2013年にはCD付の三訂版を出し、30年を経たいまでも毎年重版しているロングセラーとなった。

放送大学奈良学習センターの所長であったとき、50歳代の男性が所長室をたずねてきた。「あなたがリュミエールの三野先生ですか」と男性は言って、感激したように話し始めた。理系の技術者で、30歳を過ぎたころ、仕事上フランス語が必要になり、当時住んでいた東京の書店で片っ端から参考書を購入しては読んでみた。「リュミエール」が独学者には一番親切だとわかり、それで猛勉強して、仕事の困難を克服したとのこと。「リュミエールは私のバイブルです」と彼は言って、去って行った。森本先生にも聞いてほしいことばだった。

今春、森本先生の葬儀が近親者によって営まれたとき、棺に「リュミエール」を取めてくださったとあとで聞いた。「光の教育者」森本先生のご冥福をお祈りします。